



おつがせやしきまわり

乙亥正屋敷廻遺跡の調査成果



青谷上寺地遺跡に関連する弥生ムラ

乙亥正屋敷廻遺跡は、鹿野町に位置する弥生時代後期から古墳時代前期にかけて営まれたムラの跡です。狭小な谷の丘陵斜面から低地にかけて営まれ、竪穴住居跡や貯蔵穴、護岸を伴う水路などが数多く見つかっています。出土品も豊富で、なかでも青谷上寺地遺跡と類似する花卉高杯などの木製容器類が注目されます。

遺跡の北側にはかつてラグーンが存在していたと考えられています。青谷上寺地遺跡とほぼ同時期に繁栄し、ラグーンにほど近い立地もよく似ていますが、鉄器が少ない点や船の部材がほとんど出土していない点などが青谷上寺地遺跡とは異なる特徴として挙げられます。

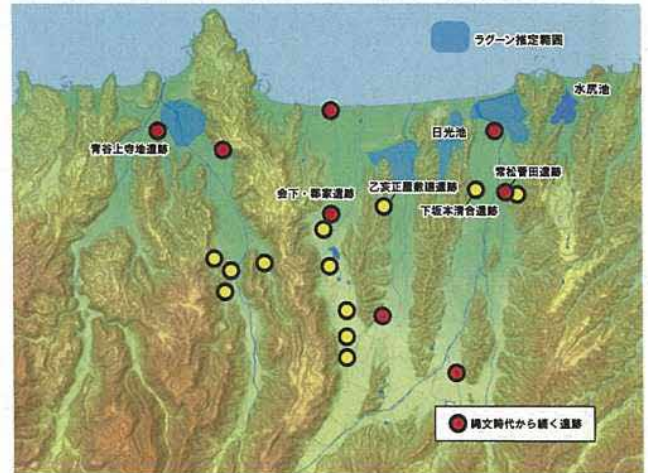
ムラの変遷

遺跡の始まりは弥生時代中期以前に遡ります。本格的なムラの形成は弥生時代後期に入ってからとみられ、その契機となったのは、隣接する丘陵上の重山1号墓（弥生墳丘墓）の築造でした。ムラでは1時期に10棟前後の住居が営まれていたと考えられ、湧水が著し谷部には、居住域を守るために導水・排水施設が連綿と築かれました。ムラは最終的に青谷上寺地遺跡と同じく、古墳時代前期には急激に衰退していったと考えられます。

急斜面に築かれた居住域

斜度30～40度もの急峻な斜面は、テラスが何段にも造成され、長期にわたり居住域として利用されました。これら建物群の多くは、短期間のうちに建て替えを繰り返していることから、谷部に営まれた通常の竪穴住居とは異なり、生活に必要な作業場や工房、物資の保管施設など簡易的な施設が主体であった可能性もあります。

復元された建物は、柱穴が一行しか確認できないことから、屋根は片流れの構造であったと考えられます。復元された床面も幅2.1mと狭く、長細く簡易的な建物であったことが分かります。



弥生時代の西因幡と乙亥正屋敷廻遺跡



乙亥正屋敷廻遺跡と重山1号墳



急斜面の居住域と建物構造



ムラの中央に築かれた大型建物跡



板や杭で護岸された水路

護岸された水路の整備

谷部の低地部は湧水が著しく、板や杭によって護岸された水路が数多く整備され、人々が水をコントロールすることに苦心した様子がうかがえます。集落内の排水を行う一方で、導水により生活用水としても利用していたと考えられます。



谷部に大量の投棄された建築部材

谷を埋め立てた大量の建築部材

また、遺跡の南側に入り組んだ谷部では、大量の木製品や土器が廃棄された状態で見つかっています。なかでも注目されるのは建築部材で、掘立柱建物一棟全体を復元できるほどの様々なパーツが出土しています。谷部はこうした遺物の投棄や土砂による人工的な埋め立てにより最終的に埋没してしまいます。

勝谷地域の首長墓

乙亥正屋敷廻遺跡に隣接する丘陵頂部には、弥生時代後期の墳丘墓である重山1号墳丘墓が築造されています。方形で、貼石を持つ大型の墳丘墓で、勝谷地域を治めた首長の墓と考えられます。



重山1号墳丘墓 (弥生墳丘墓)

写真提供：鳥取市教育委員会



花卉高杯

朱塗りの壺

青谷上寺地遺跡の似た秀麗な木製容器

腰掛

銅鏃

乙亥正屋敷廻遺跡の豊富な出土品の数々